

移動式解体処理車導入モデルケースのイメージ

地形が急峻
地形が山深い
捕獲が広域にわたる

搬入に
時間が
かかる

狩猟者が高齢で
食肉処理施設まで運搬できない

食肉処理施設建設に
住民の合意が得られない

わな猟が中心

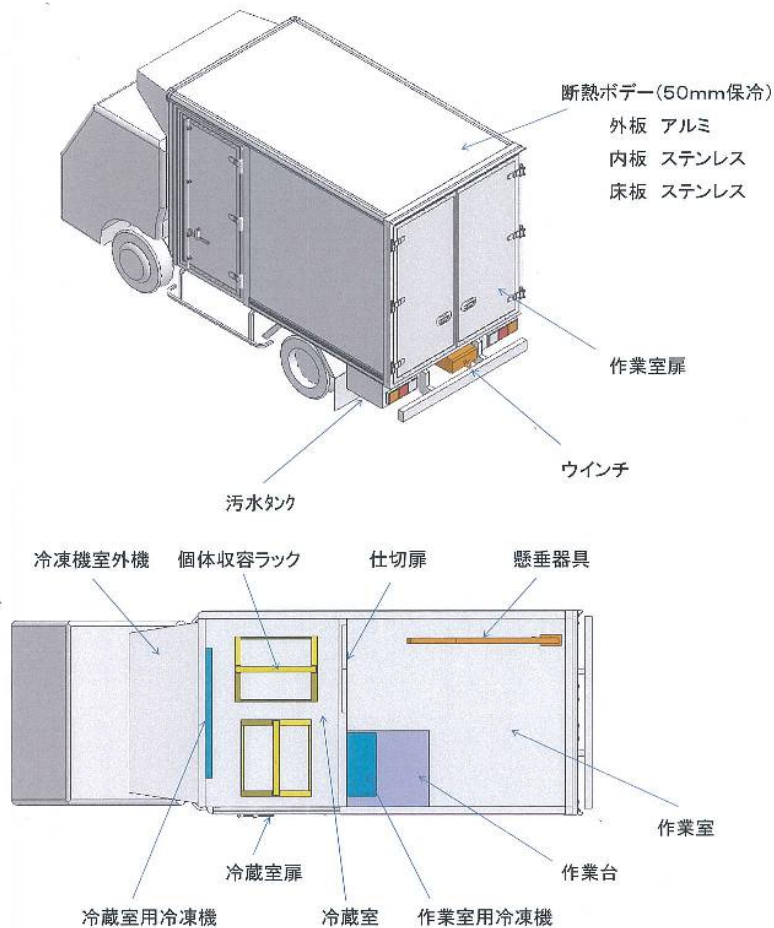


導入の目安

- ・ 農道や林道沿いで、わなによる捕獲頭数が年間500頭以上
- ・ 捕獲現場から食肉処理施設までの搬入時間が長い(目安は30分以上)
- ・ 捕獲個体が重くて軽トラックに乗せられない
- ・ 条件の良い土地はあるが、住民の反対が予想され建設が困難

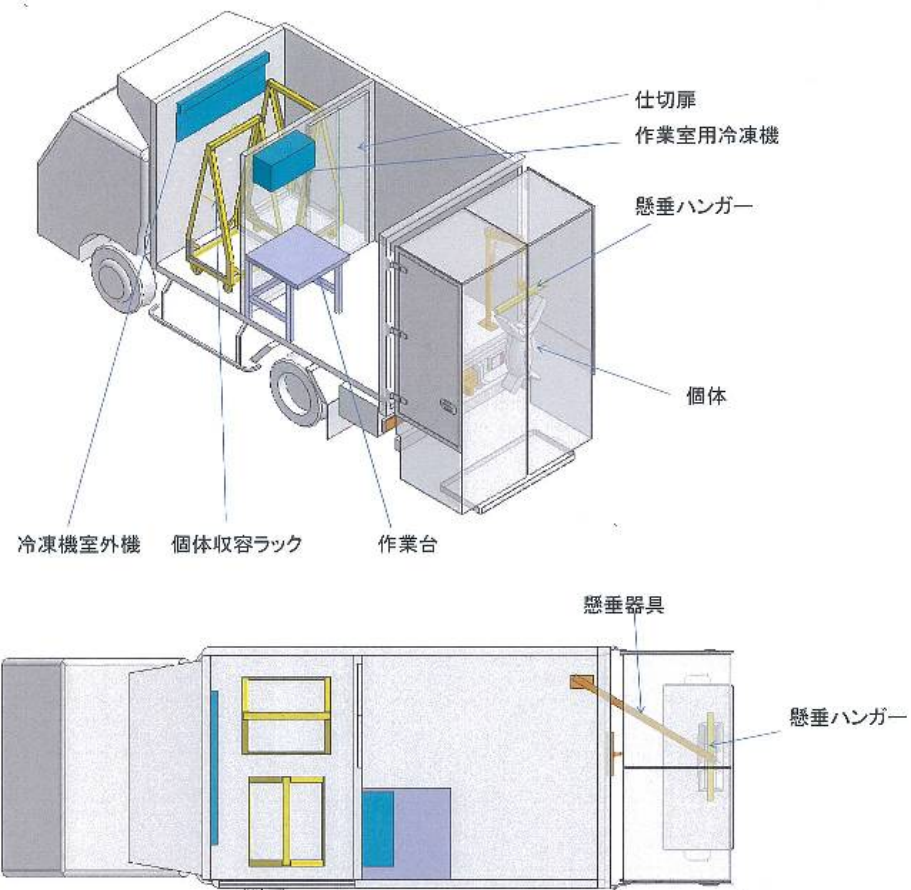
① 車両移動

個体引取り現場まで冷凍機を起動して冷蔵室と作業室を冷却



③ 個体懸垂・洗浄・放血

個体を懸垂、洗浄後に放血



※個体を運べない場合はトレーに乗せてウインチで牽引

参考 食肉処理施設と移動式解体処理車の比較

① 食肉処理施設と移動式解体処理車の設備の比較

作業内容	食肉処理施設	移動式解体処理車
懸吊	レール	クレーン
個体の洗浄	水道水・洗浄機	洗浄機
器具等の殺菌	殺菌庫・温湯給湯器・次亜塩素酸Na	殺菌庫
作業室の冷却	家庭用エアコン	保冷器
作業床面・壁面	モルタル	撥水性素材
施設床面・壁面の洗浄	水道水	電解水生成装置

② 食肉処理施設と移動式解体処理車の衛生管理、品質管理、処理能力の比較

作業行程	食肉処理施設	移動式解体処理車
搬入時間	一般的に30分から60分	数分
搬入中の冷却	軽トラックで搬入するため冷却できない	作業室は常に冷却されている
床面・壁面の消毒	水道水で洗浄するため殺菌できない	アルカリ水と酸性水で洗浄・殺菌できる
作業中の個体の冷却	作業中は冷却できない	冷却しながら作業が出来る
器具等の消毒	厚生労働省の指針に基づいた設備	厚生労働省の指針に基づいた設備
1日の処理頭数	一人で3～4頭可能	1回の出勤で2～3頭可能

参考 食肉処理施設と移動式解体処理車のメリット・デメリット

① 解体処理の作業面

	食肉処理施設	移動式解体処理車
個体の品質の劣化	搬入時間や外気温により劣化が進む	捕獲後直ちに処理できるので劣化しない
狩猟者の手間	施設まで運搬する必要がある	運搬する必要はない
食肉処理業者の手間	搬入されるまで作業が出来ない	捕獲現場に行き、着き次第作業できる
施設の洗浄	モルタル部分が多いため洗浄が大変	撥水性素材なので洗浄が楽

② 経費面

	食肉処理施設	移動式解体処理車
建設費：公的資金活用	3,991万円	車代 約1,400万円
	第1次・2次処理施設を含む	新規の場合第2次処理施設のみ建設
既存施設での導入		約1,400万円の追加費用が必要
新規施設での導入	第1次・2次処理施設を設置	第1次処理施設を代替できる
維持費	減価償却費、光熱水料	減価償却費、車検代、保険料、燃料費

参考 移動式解体処理車導入の最適条件

- 年間処理頭数は450頭以上 【1回に処理できる頭数約2頭×225日】 必須
- くくりわな又は箱わなで捕獲 【わなは道路から近い場所に設置されているので車に乗せやすい】 必須
- 公的資金を活用して整備 【購入費用が約1,400万円必要であり、個人での購入は難しい】
- これから整備する食肉処理施設は第一次処理施設を移動式解体処理車が代替 【年間800頭以上処理する施設は併用が最適】
- 捕獲範囲が広域であったり地形が急峻で食肉処理施設への運搬が困難 【搬入時間がかかり肉が劣化】
- 狩猟者が高齢で軽トラックへの運び込みが困難 【食肉利用を断念】
- 食肉処理施設建設に住民が反対 【住民が反対するダークゾーンの処理を車内で行える】